

コラム 4

『旧高旧領取調帳』のことなど

―木村礎先生と近藤安太郎さん―

伊藤 康晴

『旧高旧領取調帳』（全六冊）は、村落史研究を生涯の仕事にされた木村礎先生（一九二四―二〇〇四）の校訂による。一九六九年に近藤出版社より第一冊目の「関東編」を発行。一〇年後の一九七九年に完結。先生四五〇五五歳にかけての仕事となる。北海道・沖縄県をのぞく全国の旧村名・旧村高・旧領名などについて明治初期に調査された一覧記録を翻刻・出版したものである。その後国立歴史民俗博物館においてデジタル検索システムが作成・公開されている。

筆者が木村先生主宰の調査合宿に初めて参加したのは学部二年生の時であった。当時は「キュウタカキュウリヨウ」と聞いて文字が浮かばなかった記憶がある。当時先生は「（校訂作業は）一人でしたので大変だった」と仰っていたように思う²。この度少し気になったので、同書について何か述べていないか著書を確認すると、『戦後歴史学を生きる』の「一九六九年」の項目に以下の短文を書かれていた。

近藤出版社社長近藤安太郎氏のすすめに応じて、『旧高旧領取調帳』を全部刊行する気になり、これ（「関東編」筆者）がその第

一冊目。定本が写本（原本は焼失）なので校訂作業は大変だった。少々健康を損なうほど、この仕事に打込んだのだが、それでも刊行後、諸方からさまざまな御指摘を受けた。しかし、これは誰かがやるべき仕事なのであり、やってよかったと思っている。（二五二頁）

近藤安太郎さんの熱意により全編の校訂作業を決意したことがうかがえる。「さまざまな御指摘」とは、主に村落名称に関わる誤写・誤記についてである。本文にもあるように、原本は関東大震災で焼失していたことから、定本は先生の勤務先でもある明治大学図書館の所蔵する蘆田伊人文庫の写本が利用された。写本に誤写のあることは当初より予想されており、かつ欠本もあったことから、諸史料を以て補完・校訂されたわけであるが、先生と雖も全国の村データの校訂となれば労力的には限界がある。それでも「誰かがやるべき仕事」を請け、十年かけてやり遂げるには近藤さんとの関係を抜きには当然語れない。

筆者は以前、「児玉幸多先生の思い出」という小文において、児玉先生、木村先生、近藤さんの三人が、七月七日七夕の日に毎年一回集まって酒をのんでいたことを紹介したことがある³。お酒をのむ木村先生から聞いた話なので、このような表現になるわけだが、実は近藤さんはのまない方だったと聞いている。

近藤さんは戦後、老舗の歴史書出版社、吉川弘文館の編集部長（取締役）をされた方である。木村先生は一九六四年に吉川弘文館より『近世の新田村』を出版していることから頃からのお付き合いと想像される。のちに近藤さんは吉川より独立して近藤出版社を創立。一九六九年より歴史史料や研究書の出版に着手。その最初の年に『旧高田領取調帳』（関東編）は出版された。会社の創立に合わせて準備されたとみられる。

児玉先生編による『くずし字解説辞典』『くずし字用例辞典』などでも好評を博した⁴。辞典には書かれていないが、驚くことに辞典の「くずし字」は、すべて近藤さんの自筆によるものである。くずし字辞典の出版は古文書を読もうとする人々の裾野をひろげ、地方史研究の活性化も視野に入れていたはずである。戦後の歴史学界にそれぞれ寄与されたお三方の会話が聞こえてきそうである。『旧高田領取調帳』の出版も然りで、最終巻「東北編」の解題末尾には以下のようにある。

本書が日本史研究上の基礎史料たることは全く疑うべからざることであり、そのことが私にある種の使命感を持続せしめたのである。本書の定本が写本であることによって生じた校訂上の困難は少なくなかったが、最も感銘を受けたのは、本書刊行を十年間に

わたり熱心に推進された近藤出版社社長近藤安太郎氏の見識である。

色褪せることのない学恩に感謝である。

（鳥取市歴史博物館主査学芸員）

【註】

1のち近藤出版社廃業により東京堂出版より新装再版されている。

2 清書原稿の作成に数名の門下OBが手伝った冊もある（同書解題参照）。

3 『鳥取地域史研究』第一〇号「記念エッセイ」、二〇〇八年

4 1と同様にのち東京堂出版より新装再版。